

書人 頼杏坪 天衣無縫の書

頼杏坪（一七五六～一八三四）は、歴史書『日本外史』の著者として知られる頼山陽の叔父にあたります。

幼い頃から書に秀れ、九歳になった明和元年（一七六四）には、忠海（広島県竹原市）に寄港した朝鮮通信使一行の前で書を披露し、一同を驚嘆させたといわれています。

長じて広島藩の儒員となり、藩政の実務にも関わるようになった杏坪は、勤務に邁進する傍ら、詩歌を詠じ、能書家として名を馳せました。その書は、いわゆる唐様ですが、和歌を好んだこともあり、その柔らかな筆遣いには仮名書の影響も見て取ることができます。

本展では、厳選した書作品を紹介し、書人頼杏坪の書の特質とその魅力に迫ります。

【展示構成】

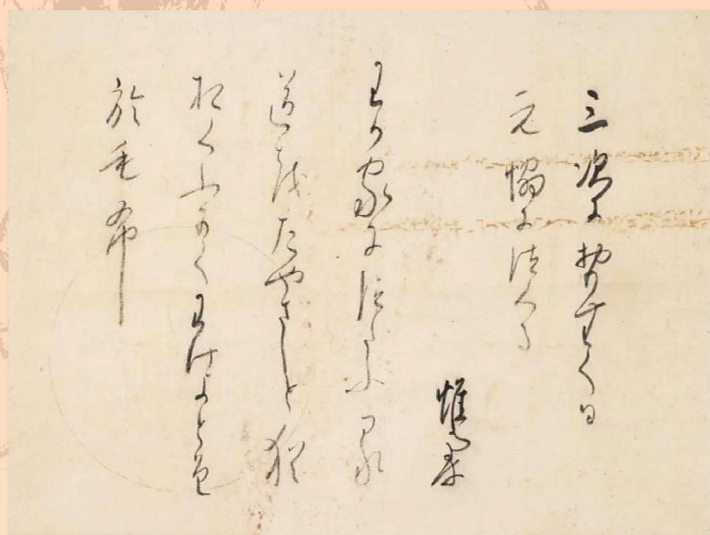
- 第一章 若き日の頼 杏坪
- 第二章 頼 杏坪の書風
- 第三章 歌人頼 杏坪

聞汝前身為藥草一本
若人過是落葉似成根
目無存舊 驅盡一夜妖言
了遺

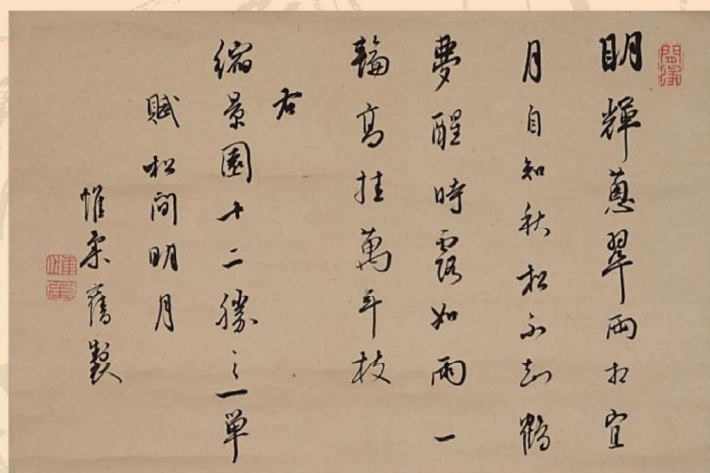
吉城錢龍



吉城



和歌「三次におもむく日 元協につくる」 頼杏坪書
当館蔵（重要文化財 広島頼家関係資料）



「松間明月」（縮景園十二勝之一） 頼杏坪書 竹原・春風館蔵